



部では最大の滝である。ミゾ状の流れとなっていて、楽に直登できる。

5m滝を越えてしばらく進むと、ナメが出てくる。このナメは、徐々に傾斜を加えながらずっと続く。最後の方は、滝といってもよいくらいである。

古滝から1時間程でナメは終わる。この先はもう細い流れとなり、ゆるやかにヤブの中に続いている。遡行終了10時15分。
(記・)

[タイム] 林道終点(8:20)→古滝上部(9:10)→遡行終了(10:15)

滝沢川源流右俣右沢 1992年8月22日

峰越林道の新潟県側から貉ヶ森山頂をめざす。貉は、化かす能力を持った狸のこと。冬毛の狸という説もある。森は、東北地方によくある呼び名で、山を現わす。私の生まれた関東地方では、平坦な森も「ヤマ」とよぶ。つまり、山には必ず森林があり、森林イコール山であって、区別する必要がないからだと思われる。

9時10分に山頂着。ガスにつつまれ視界はゼロである。降り口が見つからず、コンパスで方向を決め、ヤブの中に突っ込む。どうも目的の尾根でないような気がして、再び山頂に戻る。県境尾根を70m程南下した所で、「山786号」と書かれたコンクリート柱を発見。ここから東に張り出した尾根が、目的の尾根だ。踏跡もはっきりしていたが、次第にわからなくなる。地図上から、どこからでも南に下がれば目的の沢に降りると判断した。

下がるに従い、いくつもの水のながれた跡が集まり、やがて水が出てきた。15分程で大きな支流と合流する。このあと二俣まで連続した滝が出てきたが、目的とした滝沢川源流右俣右沢出合までの下降に使ったこの沢は滝沢川右俣左沢であり、会報「725」No.36にて遡行記録も掲載済みであるので、報告は省略する。

小雨が降り出した頃、右沢との出合に到着した。しかしめざす右沢は、変化に乏しい沢であった。なだらかな沢をトボトボと行くと、小滝が連続してあり、さらに進むと3段の滝が現われたが、何なく直登。ほどなく二俣。水量はほぼ同量。向かって右の沢は2段の滝となって落ちている。左の沢を行くと4mの滝。直登できそうにも思えたが、途中で後悔しても遅いので、左側を捲く。そしてまた二俣。右の沢を進んだが、単調である。その後2段の滝があったほかは、平凡なままで、たいしたヤブこぎもなく、13時50分、稜線に立ち廻りを終える。

(記・)

[タイム] 霧ヶ森山(9:10)→右俣右沢
出合→右沢終了(13:50)

霧来沢支流越谷沢

1992年8月22日

L

午前8時、林道からめざす対岸の沢を確認して、車から降りる。すぐにメジロ（アブの一種）の襲撃を受ける。ものすごい数だ。霧来沢に降りる。歩道はない。左岸にはモウセンゴケがたくさん生え、ひよろ長い花が咲いていた。

沢を渡り、目的の越谷沢に入る。すぐに4mの滝が現われ、直登する。そして二俣。水量の多い左側の沢に入る。

メジロが次々と集まってきて、体中に止まる。かたまっているところに平手打ちをすると、一度に10匹以上が下に落ち、沢を流れていく。

昨日降った雨のためか、両側からいくつもの小沢が流れ込んでいる。それから、次々と滝が現われるが、どれも登りやすく直登する。目の前上部に大きな岩山が現われてきた所でまた二俣。右に入ると、ほどなく5mの滝。直登はあきらめ、左側を捲く。登りきって見ると、3段の滝であ

